

源為朝

平安時代末期の武將で、後に鎌倉幕府を開くことになる源頼朝の祖父為義の八男。古今無双の弓の名手として知られる。九州にいながら、京の都にまで豪の者、暴れ者としてその名をとどろかせた。

毎年六月の第二土曜日、長い昼間の太陽が西の空にとっぷりと沈んだころ、西浦賀の為朝神社の境内に設けられた舞台では、民俗芸能の「虎踊」が繰り広げられます。「虎踊」は、野比の「虎踊」とともに「横須賀の虎踊」として国の無形文化財に指定されています。今年も、勇壮な二頭の虎が舞台いっぱい踊ります。

◇ ◇ ◇

今回は、「虎踊」が行われる為朝神社の名の由来になった「鎮西八郎源為朝」について、今に残る伝説を交えてご紹介しましょう。源為朝といえは、七尺(2m10cm)ほどの大男で目の隈が切れ上がった容貌魁偉な武者でした。鎮西(九州)で大暴れし、鎮西八郎を称するようになりました。怪力で弓の名人として、錦絵に描かれた勇ましい姿は正月に大空を舞う凧の凧柄などに用いられてきました。いわば鎮西八郎為朝という武將の名前は、勇猛な人物の代名

詞とされてきたのです。

鎮西八郎為朝こと源為朝は、保元元年(一一五六年)に起きた「保元の乱」では父・為義とともに戦いに敗れ、腕を切られたうえ、伊豆大島に流されてしまいました。「保元の乱」というのは、平安時代の末期に、朝廷と貴族がそれぞれ敵味方に分裂して争った事件です。このときに、力を付けてきた武士の二大勢力を形成する源氏と平家が、それぞれ入り乱れての戦いが行われました。

結局、この争いに決着をつけたのは平家の軍勢であり、これを契機として平家一門による政治が行われるようになりました。平清盛をはじめとする武將による政権でしたが、平安時代の名残をとどめる貴族政治の色彩が強いものでした。しかし、平家にとっては武士の実力を示すのに、格好の機会になりました。伊豆大島に流された為朝は、傷が癒えると国司の命令に従うこと

もなく乱暴狼藉を重ね、伊豆諸島を支配するようになりました。しかし、伊豆介工藤茂光の夜討ちを受け、自害に追い込まれていったといえます。



◇ ◇ ◇

時代はくんだり江戸時代の寛政年間(一七八九年〜一八〇一年)、浦賀の浜町(西浦賀四丁目付近)の漁師である高橋忠兵衛は、どこからともなく漂流してきた不思議な木製の像を海から拾い上げて家に持ち帰り、ひとまず地藏堂にお祀りしました。村の人々はこの木像を修理し、祈願を重ねるうちに、当時、疱瘡の神として信仰の対象となっていた為朝像であることになり気が付きました。恐ろしい伝染病から守ってくれる為朝さまを祀るため村の人々は、文政四年(一八二一年)、浦賀奉行所の筑紫佐渡守の許可を得て為朝神社を創建したといえます。

◇ ◇ ◇

浦賀の虎踊は、享保五年(一七二〇年)に奉行所が下田から移転してきたとき、下田の廻船問屋が伝えたと言われています。虎踊の筋書きは、近松門左衛門作の人形浄瑠璃『国姓爺合戦』に題材をとり、和藤内(鄭成功)と呼ばれる人物が台湾を舞台に明王朝の復興を企てる物語です。初夏の日没後のひととき、為朝神社の境内には伴奏の三味線が鳴り響きます。主人公の和藤内が虎退治を行う途中、かわいらしい衣装に身を包んだ唐子に踊りを所望するところから始まります。ぬいぐるみでできた大小二体の親子の虎を自在に操る曲芸まがいのシーンは、夏を呼ぶこの季節の風物詩となっています。(芳賀久雄)

*容貌魁偉：姿かたちが堂々としていて大きく立派なさま

★参考文献

- ・朝日日本歴史事典 朝日新聞社
- ・ぼんぼん船

浦賀公民館友の会連絡協議会

歴史 語りい座・浦賀 四十五



郷土史家

山本 詔一



●『近世浦賀崎人伝』IX●

― 宮井素柏 ―

宮井素柏は宮原屋与右衛門、通称宮与といい、江戸時代中期から明治にかけて東浦賀の干鰯問屋を代表する大店の三代目の主人である。幼名は金之助といい、隠居後は与兵衛といった。

家業は干鰯のほか穀物なども扱い、至極順調にいらっていたので、後継者(娘婿)に任せて、元浦川の入り江に別邸を持ち、壮年になるころには別邸での生活が中心となった。

『崎人伝』にはその場所を「元浦川」と記しているが、元浦川は現在の久比里あたりの古い地名であり、実際に宮与が別邸を建てたのは、現在の久里浜郵便局あたりで、まさに内川であった。砂村新左衛門が開発した内川新田を宮与が手に入れたのは、安永七年(一七七八年)、二代目の与右衛門のときであった。それは内川新田の半分で、石高にすると二百九拾六石余であった。

素柏が宮与の三代目を継いだのは、十代の後半と思われる。というのは、天明四年(一七八四年)に東浦賀の大火に義捐金二十五両を宮与の主人

として出していることからわかる。

このほか生活困窮者への支援など、日常的に社会福祉活動を心掛けていた。これは三代目だけではなく、二代目も行っており、こうした行動を奉行所でも高く評価して、村の年寄役格が与えられている。

素柏は俳諧を好み、初めは雪中庵(大島) 蓼太に師事した。この雪中庵蓼太は芭蕉の没後沈滞していた俳諧を活気づかせ、西の与謝蕪村・東の蓼太と言われ、その門弟は三千人にもなるといわれた巨匠であった。蓼太の没後は謂濱庵素丸の門下となり、素丸とは大変に親しく交流していたので、俳号も「素」の一字をもつて「素柏」となった。筆者には俳句を批評できる力はないが、『崎人伝』に四季の句が掲載されている。

大空も遊び道具やいかのぼり

蚊遣り火やこれにも何かとをへ言

もの喰へと呼夜もあらん鹿の声

芋喰に狐の出たる節季哉

素柏の人柄は温厚で、君子の風格がある。お酒を嗜み、遠近から客人がこに集って酒を酌み交わすが、飲みつぶれるまで帰ることを許さず、素柏自身もそこまで饗さないと気のすまない

酒癖であった。しかし、こうした深酒が禍したのか、病に伏し、寝起きもままならないようになった。それでも、人が訪ねてくると、膝をただして応対していた。臨終が迫った宵も枕元で浄瑠璃を語らせ、その翌朝ほほ笑みをうかべて黄泉の国へと旅立った。

素柏は天明六年(一七八六年)元旦から日記を書き始めた。この日記には天候から自然災害、素柏を訪ねてきた人、淋しい別れを告げた人、飲食から時の話題と細かに記されていた。もちろん自身が旅に出る時にも必ず持参したという。素柏は、生涯を閉じる日までこの日記を記していた。

もし日記が現存していたら、訪問客のなかに俳人の小林一茶が記されていたことであろう。一茶は二六庵竹阿の門下であったので、どのように知り合ったのかわからないが、一茶が西国行脚へ出掛ける前に素柏を訪ねており、素柏は饞別吟を贈っている。

文化十三年(一八一六年)十二月、五十三年の生涯を閉じた。仏名は釈教遵とつけられた。



笑話一題

福澤諭吉が晩年にしるした『福翁自伝』には、中島三郎助についての記述があります。福澤の謹慎処分を、稲葉美濃守という老中に掛け合い、解いてもらったというものです。

しかしながら、当の本人は「幕府の引込め」というのはまことに楽なもので、外に出るのはいっこうかまわぬ。ただ役所に出さなければよるしいのであるから、一身のためにはなんともない。かえって暇になつてありがたい(中略)そのときに西洋旅案内という本を書いていました」と謹慎ライフを楽しんでいるようです。もしかしたら、福澤にとって「出してやる」という三郎助の申し出はありがた迷惑だったのでは、と思つてしまいます(笑)。

しかし、福澤は三郎助のことを立派な武士と前述の著書にしている。さすがは我らが三郎助、彼がいなければ慶應義塾大学も一円札も今とは違ったかも…。

～俳句の散歩道～

梅東風や路地に江戸期の番屋跡

田島 耕史

聴きとめし浦賀城址の初音かな

雅楽川 弘志

当館では「浦賀」や「中島三郎助」にちなんだ俳句を募集しています。ご応募いただいた中から優秀な作品を浦賀文化(本誌)掲載もしくは当館玄関に順番に掲示しております。詳細は、職員におたずねください。

一句ひねって

ご投稿ください